

～フィールドこぼれ話～

かけがえのない与論島暮らし

森 隆子（鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻）

「与論島で、保健師として働いてみませんか？」—この誘いを機に、私の島での暮らしが始まった。当初の予定は10か月。10か月ならば、まずはチャレンジしてみようかな—そのように決めてから2、3週間後には島へと向かっていた。初めての島暮らし。町役場にある地域包括支援センターの保健師（会計年度任用職員）としての日々が始まった。新参者でペーパードライバー、さらには教員経験しかなく実質的に新人保健師ともいえるアラフォーの私を「そのまま来てくだされば大丈夫です」と受け入れてくれた島の懐の深さには、正直今でも驚いている。その寛容さは、果たしてどこからきているのか、と。

与論島での暮らしをふりかえてみると、時計の針が少しだけゆっくりと進んでいるように感じられることもあった（といっても実際には、時計の針がむしろ早く進んでいる！と感じられる場面も多々あったのだけれど）。島を歩けば、誰かが縁側の椅子にゆったりと腰かけてはパトロールという名目で街中を眺めていたり、浜辺に腰を下ろして語り合っていたり、海岸端でのんびりと夕日を眺めていたり……。私自身も海を、そして島を眺め、その美しさに何度も心を奪われ、時に救われた。こうして島の暮らしを続けているなかで、次第にその“ゆるやかさ”こそが、島の日常を支えている重要な余白なのかもしれないと感じるようになった。

たとえば、ちょっとした場面において、時には真剣と思しき状況のなかでも小さな雑談やユーモアが混じり合っている（と、私には映っていた）。しばらく眺めていると、次第にゆるやかで一見些細に映るもののなかにこそ大事なことが宿っていることがわかってくる。決めすぎない、固めすぎない。ゆるやかな輪郭だからこそ、思わぬアイデアや行動が生まれる。余白に対する寛容な姿勢に、より新しい可能性が拓かれていくことを学んだ。

島で過ごした約3年間は、自らの在り方にも深くつながる学びをもたらしてくれた。厳密な仕組みや計画だけではなく、あえて寛容さと余白を残すこと。そこから、予想もしない展開が紡がれていく。何かが定まらないようにも映る状況下で、時に何かが始まりうる。その可能性を信じられるかどうか—それが、与論島での暮らしが私に残してくれたもっとも大切な問いかけである。



写真1. 与論島に到着



写真2. サトウキビ刈体験